

京都大学	博士(文学)	氏名	戸江 哲 理
論文題目	子育て支援サークルの会話分析		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究は、子育て支援サークルという場所を舞台に、親(主として母親)・子ども(主として0歳から3歳の乳幼児)・スタッフ(子育て支援サークルを管理・運営し、現場で親子を支援する)という主要なアクター3者が日々行っているコミュニケーションの様態を会話分析の方法を用いて解明するものである。この作業を通じて、従来の会話分析が未発見だった会話的な手続きを見つけ出し、これらのメカニズムを可能な限り詳らかにすることが本研究の第1の目的である。</p> <p>また、会話分析的な探究を通じて、本研究は家族社会学・子ども家庭福祉の両領域から子育て支援サークルを捉えた場合の課題についても解を提出する。家族社会学から見た場合の課題は、「子育て支援サークルで育児不安が和らぎ、育児ネットワークが紡ぎ出されるプロセスはどのようなものか」である。これに対して子ども家庭福祉から見た場合の課題は、「子育て支援サークルのスタッフの専門的スキルとは何か」と表現できる。これら2点の課題を解明することが本研究の副次的な目的である。</p> <p>1章は、導入部であり、課題・目的・研究手法・フィールドといった本研究の基本的な要素について簡潔に述べた。</p> <p>次の2章・3章では、4章以降の会話データの検討に向けた準備作業を行った。2章では、会話分析と会話分析の発想の基礎にあるエスノメソドロジーについて概説した。エスノメソドロジー的研究は、人々が行っている活動のインストラクションとなる会話分析については、基本的なアイデアを説明し、悩み語りなど本研究と関係が深い研究トピックを整理して、本研究の位置と意義を明確化した。</p> <p>続く3章では、本研究が調査対象とする子育て支援サークルへと目を向け直した。この章においては、関連する家族社会学・子ども家庭福祉の先行研究を概観し、子育て支援サークルの概念・活動内容・歴史的推移などを整理した。また本研究がフィールドとした大阪府下の子育て支援サークル2ヶ所を両者の比較も行った。</p> <p>4章から7章までが本研究の中心となる会話データの検討である。4章・5章では、子育ての話が開始・導入される手続きを取り上げた。4章では、子どもにかんする悩み語りや愚痴が、その場にいる他の母親への質問をきっかけとして導入されるという会話上の手続きを検討した。この質問は、先行するやりとりとの断絶を刻印するなどして、語るべき悩みがあるというふくみを伝える。回答者がこのふくみに注意を払いながら回答した場合、この回答の後の位置に質問者が自分の悩みを語るスペースが用意されることになる。この手続きを本研究では、他の母親への質問が自分の悩み語りの</p>			

糸口となるという意味で「糸口質問連鎖」と名づけた。

5章では、子どもの普段の様子についての語り、その場での子どもの様子に対する他の母親からの描写をきっかけとして開始される手続きを検討した。誰かの子どもの様子を見ていた別の母親が、当該の子どもの様子について見た通りに描写する。様子を描写された子どもの母親は、この描写に対して単に承認を与えるだけでなく、子どもの普段の様子について語るという手続きである。他の母親による子どもについての描写が母親に子どもの様子を語らせるという意味から、この描写を「説明促し」と名づけ、この行為の連鎖を「説明促し連鎖」と名づけた。

4章・5章が話題の開始部を扱ったのに対して、6章は母親たちが既に自分たちの子どもについて語り合っている部分を扱った。母親たちが自分たちの子どもにかんする愚痴・悩みを分かち合い、この愚痴・悩みに対して何らかのアドバイスを差し出し、これらのアドバイスが受諾・拒絶されるメカニズムを解明した。愚痴・悩みの分かち合いが達成されているとき、自分自身の場合にかんする報告はアドバイスとして聞くことが可能なものとして差し出されている。同時に、この報告は単なる情報提供として聞く余地も残しているがゆえに、受け手はアドバイスの拒絶を回避できる。

そして7章では、これらの会話を通じて母親たちがお互いの関係性を構築・維持・更新していくプロセスを取り上げた。同じく子どもの成長・発達上の問題を話題にしている、親しい関係となった母親たちの会話と、初対面の母親たちの会話を比較すると、後者の会話にはお互いの距離を詰めるチャンスが埋め込まれている。

以上4章でデータ分析の中心部分は完了し、残る2章で総合的な討論と知見の整理を行った。8章では、本研究の問題設定・目的を再確認した上で、前4章で得た個別的な知見を整理しそれを踏まえて、本研究全体を貫通するいくつかのモチーフにつき、先行研究の知見や子育て支援サークル以外の場面の会話データとも突き合わせながら論じた。その結果、会話分析的な知見として、愚痴の全域的構造の候補を提出した。次に、本研究で析出した会話の手続きが子育て支援サークルに限定的なものでなく、様々な場面で利用可能な「ありふれた」ものであることが明らかとなった。このことからさらに、日常的なコミュニケーションに対して敏いことが、子育て支援サークルのスタッフの重要な専門的技能であることも示唆した。

最後の9章では、本研究全体を大局的な見地から捉え直して結語とした。本研究が析出した会話の手続きは、育児不安が和らぎ、育児ネットワークが構築される一連のプロセスを解明したものといえる。同時にこれらの手続きは、子育て支援サークルを利用する母親たちが日々直面するコミュニケーション上の課題に対する解でもあり、その母親たちを支援するスタッフにとって重要な会話の手続きでもあった。さらに、これらの手続きは子育て支援サークル以外の様々な場面でも利用可能な手続きであった。本研究は子育て支援サークルという場面の会話データを検討してきたが、結果として得た会話の手続きは、当該場面に留まらない射程をもっている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、子育て支援サークルを対象とした長期にわたる参与観察調査に基づき、そこで交わされている会話について精密な会話分析をおこなったものである。

会話分析とは、ふだんは自明とされている会話の手続きを分析することにより、日常生活を送るうえで極めて平凡なことがいかにして成し遂げられているのかを解明しようとする研究方法である。会話分析は、「人々が用いているやりかたにかんする研究」であるエスノメソドロジーの発想を受け継いでいる。ジャズピアノの演奏に関するエスノメソドロジー的研究書が、ジャズピアノの入門テキストとなったように、このような研究の成果は日常を生きる者へのインストラクションとなる。

本論文は、この会話分析という方法を、子育て支援サークルという実践的な場に適用する。子育て支援サークルとは、育児中の母親たちが社会的ネットワークを失って孤立し、育児不安におちいるのを防ぐことを主たる目的として運営されている子育て支援のためのグループである。乳幼児を連れて母親が集まり、そこに子どもや親を気遣う専属のスタッフがいて、サポートを与える。政府・地方自治体からの援助を受けていることが多い。本論文は、子育て支援サークルにおいて、母親どうしの間で、あるいは母親とスタッフの間で用いられている会話の手続きとはいかなるものかを解明し、育児不安の解消や育児ネットワークの構築はいかにして可能か、子育て支援サークルスタッフの専門的スキルとは何かという実践的な問いに答えを与えようとする。

筆者は2006年から2009年まで大阪の子育て支援サークルにボランティアとして参加して、調査目的を説明したうえで会話を録音し、その精密な分析を行った。そこから見いだされた会話の手続きは以下のようなものである。

第一は話題を開始する手続きであり、本研究が「糸口質問連鎖」となづけたものである。質問者はやや唐突に回答者に質問を投げかけるが、その質問は「悩みごとの前触れ」として理解されるものである。回答者の回答に対して、質問者は回答者の子どもを褒め、自分の子どもについての悩み(愚痴)を語り出す。回答者が長く語りすぎると、質問者は回答者の子どもを称賛することで、発話の機会を譲るように促すという手立てをつかう。

第二も話題を開始する手続きであり、筆者はこれを「説明促し連鎖」となづけた。質問者は目前の子どもの行動を描写したり謎を提示したりすることにより、普段の子どもの様子を知っている親だからこそできる表示タイプの(証拠を示す)説明を要求する。主張タイプの(証拠を示さない)応答では不十分とみなされ、さらなる応答の追求がなされる。これは子どもについて責任をもつ親としてのアイデンティティを強化する実践である。

第三の子育ての悩みの分かち合いは、「うち解けた雰囲気」で「問題解決」の機会を提供する仕組みであり、母親どうしのつながりがストレスにならずに機能するためにとりわけ重要である。母親たちは同じ経験をもつことを(主張ではなく)「立証」しあ

う。ときには家事の手抜きというような「不道德」な行いを「自分の場合」的に提案することによって、同じグループに属するものとしてのメンバーシップを強化する。

「先輩ママ」が「自分の場合」的に提案や「見通し」を語ることがあるが、これはアドバイスというより情報提供というかたちをとるので、受諾しても拒否してもよい。興味深いのは、提案や見通しが拒否されて、愚痴の語りが続けられることがしばしばあるという点である。子育て支援サークルでの会話は強く問題解決を志向したものではなく、受け手もそれを望んではいない。むしろ愚痴や悩みを語り続けることこそが、日々を「だましだまし」乗り切るための「支え」となっており、「問題解決の糸口」としての意義をもっているのである。

子育て支援サークルは、政府の支援を受けた「フォーマルなサポートでありながら、母親どうしのインフォーマルなサポートを創出していく」という点に特徴のある子育て支援事業である。スタッフには、専門知識を用いるより、ひとりの母親として上手にふるまいつつ、お茶のタイミングなどに細心の注意を払うという、コミュニケーション的スキルがもっとも必要とされる。専門家によるアドバイス等に比べ、脆弱なサポートと思われるかもしれないが、それこそが母親たちが望んでいるものだという点を本研究は説得的に論証している。

本研究は、育児不安の解消や育児ネットワークの構築と言われることの本質は、会話によるコミュニケーションであり、その手続きに注意を払いつつコミュニケーションを続けることそのものが課題の解決であることを示した。ともすればフォーマルなサポート提供を提言して終わりがちな家族社会学の領域に、会話分析という手法を導入することにより、当事者にとってもっとも切実なミクロな社会過程に光を当て、実践へのインストラクションとなるような会話の手続きを見出した意義は大きい。

最後に筆者は、本研究で析出した会話の手続きは子育て支援サークルに限定的なものではなく、様々な場面で利用可能な一般性をもっていることを示唆しているが、その結論を導くには、さらに制度的背景の異なる場面での会話分析を集積することが必要だろう。しかしそれについては筆者も今後の研究課題として追究されるべきものと自覚しており、本論文の価値を損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2011年8月11日、審査員3名が論文内容とそれに関連した事柄についての口頭試問を行った結果、合格と認めた。